

# 英語における引用句構文の統語分析

---

小林亮哉

---

## 1. 導入

引用句が文頭に位置する場合に主語と動詞の倒置が随意的に生じる。引用句を伴う (1) に示す文は引用句構文 (quotative construction: QC) と呼ばれるが、とりわけ、主語と動詞の倒置が生じている (1b) のような文は引用句倒置構文 (quotative inversion: QI) と呼ばれる。

- (1) a. “We haven’t had that spirit here since 1969,” the captain said.  
 b. “We haven’t had that spirit here since 1969,” said the captain.

(Gyoda (1999: 276))

QIの表層構造は (2) に示される場所句倒置構文の表層構造と類似しており、どちらも第一構成素・動詞・主語の語順で生起する。

- (2) Down the hill rolled John (Collins (1997: 10))

そのため、これらの2つの構文の主語は基底生成位置に留まり、通常の主語位置であるTP指定部に移動しないという分析が提案されている (Collins (1997), Wu (2008))。これに対して、本稿では、QIにおける主語はTP指定部に移動すると主張する。そして、引用句は項ではなく付加詞であると仮定するとともに、Tanaka (2011) のフェイズ理論に基づく修飾関係の構築条件の分析を援用する。これは修飾要素と被修飾要素が同一の転送領域に含まれる必要があるということを定めた条件である。本稿では、引用句を修飾要素、動詞を被修飾要素として扱い、それらが同一の転送領域内で修飾関係を築く必要があるという条件を提案する。これにより、QIの派生に対して理論的説明が与えられるこ

とを示す。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、2つの先行研究を概観するとともにそれらの問題点を指摘する。3節では、QIにおける主語位置について経験的事実を基に議論する。4節では、QCにおける動詞の特性を示す。5節では、引用句の特性を示す。6節では、本稿における提案を提示し、その帰結として、QCの持つ様々な特性が説明されることを示す。7節は結論である。

## 2. 先行研究

本節では2つの先行研究を紹介し、それらの問題点を指摘する。

### 2.1. Collins and Branigan (1997)

Collins and Branigan (1997) は (3) のQIの統語構造として (4) を提案している。(なお、取り消し線は陰在的移動を示している。)

(3) “When on earth will the fishing begin again?” asked Harry.

(4) “When on earth will the fishing begin again?”<sub>i</sub>

[CP Op<sub>i</sub> asked [TP Harry asked [<sub>AgrP</sub> asked<sub>j</sub> [VP Harry <sub>t<sub>j</sub></sub> <sub>t<sub>i</sub></sub>]]]]

(cf. Collins and Branigan (1997: 11))

彼らの分析のもとでは、主語は元位置に残置し、談話において引用句と同一指示となる空演算子が動詞の補部位置に生成される。この派生において、Cは [+quote]素性と [+quote-V]素性を持つと仮定され、これらの素性は空演算子がCP指定部に、動詞がCに、それぞれ移動することによって照合される。加えて、Collins and Braniganは「弱い」EPP素性を仮定しており、QIにおけるTのEPP素性は陰在的な統語部門で照合されることができると主張している。

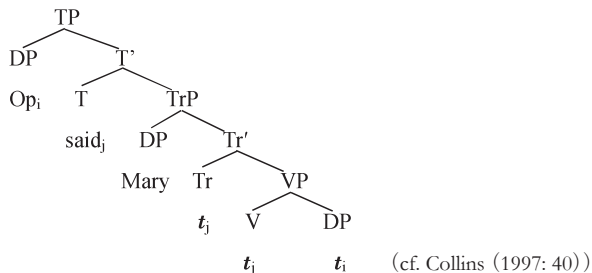
しかしながら、Collins and Braniganの分析には理論的問題がある。彼らの分析では、QIにおけるCは空演算子と動詞の移動を動機付けるための [+quote]素性と [+quote-V]素性を持つと仮定されている。しかしながら、この仮定は独立した動機付けを持たず、QIの語順を派生するためだけに設けられた規定であり、原理的な説明を与えたことにはならない。

## 2.2. Collins (1997)

Collins (1997) は QI の統語構造として (6) を提案している。

(5) “I am so happy,” said Mary.

(6)



(6) において、主語は Tr (ansitive) P の指定部に併合され、その位置から移動することはない。その一方で、動詞の補部に併合された空演算子は TP 指定部へ移動し、動詞は Tr を経由して T へと移動すると仮定されている。Collins (1997) の分析においても、Collins and Branigan (1997) と同様、主語が基底生成位置に留まると仮定されている。

しかしながら、この分析には理論的問題がある。Collins (1997) は T の EPP 素性を満たす方法として、(7) を仮定している。

(7) The EPP-feature of T may enter into a checking relation with the quotative operator only if V[Quote] adjoins to T.

(Collins (1997: 41))

この仮定によれば、QI において、空演算子と動詞が TP において指定部・主要部の一一致関係にある場合においてのみ、EPP 素性が満たされる。しかし、これは QI の語順を導くための規定にすぎず、独立した動機付けを持たないため、理論的に問題である。

## 3. QI における主語位置

本節では、先行研究の立場とは対照的に、QI の主語位置は通常の文と同様に TP 指定部であると主張する。これは 3 つの経験的証拠に基づいている。

1つ目の証拠は付加疑問文から得られる。付加疑問文に現れる代名詞は主節のTP指定部を占める要素と人称・数に関して一致しなければならない(Culicover (1992))。Arano (2014) や Bruening (2016) が指摘しているように、QIにおいて、付加疑問文に現れる代名詞は主節主語と人称・数において一致し、虚辞の*it*や*there*が現れると非文法的となる。<sup>1</sup>この事実はQIの主語がTP指定部に位置していることを示唆している。

- (8) “Hello,” said the prettiest woman you ever did see, didn’t she?  
 (\*didn’t there / it) (Bruening (2016: 118))

2つ目の証拠はコントロール構文から得られる。Gyoda (1999) が指摘しているように、(9)において、QIの主語は付加詞節内にあるPROのコントローラーとして解釈されることが可能である。

- (9) “I thought Y’all were going to wait,” said the girl, [PRO fiddling with  
 a package of cassette tapes she was holding]. (Gyoda (1999: 278))

付加詞節が $v^*P$ に付加されているという標準的な仮定 (cf. Nissenbaum (2000), Hornstein and Nunes (2002)) に従えば、付加詞節内のPROを構成素統御し、コントロールしているQIの主語は付加詞節よりも構造上高い位置にあると考えられる。したがって、(9)の事例はQIの主語がTP指定部に位置していることを示唆する。

3つ目の証拠は等位構造から得られる。一般に等位構造において、等位項は平行的な統語構造を持つとされる。

- (10) “Very well, on this occasion,” said Thomas, and lapsed into an understanding  
 silence. (Gyoda (1999:279))

Gyoda (1999) が指摘しているように、(10)のQIにおいて、第一等位項の主語Thomasは第二等位項の主語としても機能している。第二等位項内の動詞lapseは非対格動詞であるため、第二等位項はVP内に主語の空所を持つことになる。等位構造制約の全域一律規則適用の原理 (Ross (1967)) に従えば、第一等位項の主語と第二等位項の主語が全域的にTP指定部に移動し、2つの等位項内に主語の空所が残されると分析される。したがって、(10)の事例もまたQIの主語位置がTP指定部であることを示唆する。

#### 4. QCに現れる動詞の特性

本節では、QCに現れる動詞の特性について述べる。Gyoda (1999) に従い、QIにおける動詞は助動詞 *have*, *be* などと同様に意味的に軽いため、Tに移動可能であると仮定する。Chomsky (1995) は「助動詞 *have*, *be* の移動はそれらが意味的情報を持たない空の要素であることを反映している」と主張している。Uchida (1979) によれば、QCに現れる動詞は [*say*+*a*] という意味特性を持ち、以下の2つのタイプに分類される。1つ目は動詞1語で [*say*+*a*] の意味を表すもの (R1) で、2つ目は *a* の意味のみを表すもの (R2) である。Uchida (1979) による R1 と R2 に属する伝達動詞は Table1 に示される通りである。

**Table 1.** QCに生起する伝達動詞の種類

R1	<i>answer, beg, declare, demand, explain, insist, promise, recommend, shout (out), suggest, whisper, etc.</i>
R2	<i>burp, giggle, groan, growl, laugh, shriek, sing, sob, weep, etc.</i>

一般にR2に分類される動詞は発話行為そのものとは直接的に結び付かない動詞であるが、発話に付随する話者の伝達の意図を表すことができる。これに基づけば、QCにおいては文頭にある引用句によって *say* の意味が伝達されると考えられる。その結果として、動詞の意味が希薄化され、その役割は話者の伝達の意図を補足するという機能的役割に変化していることが導かれる。このことは以下の経験的事実によって裏付けられる。

- (11) a. He giggled and said, “Cochon.”  
 b. \*He giggled, “Cochon.” (Uchida (1979: 24))

- (12) a. “He worked hard,” Madame Volet said and giggled.  
 b. “He worked hard,” Madame Volet giggled.  
 (Uchida (1979: 24))

(11a, b) の対比が示すように、引用句が前置されていない場合、R2に属する動詞である *giggle* は単独で引用句を補部にとることができず、*say* が義務的に必要である。一方、(12a, b) から分かるように、引用句が前置されている場合

は giggle だけで容認可能であり, say の生起は義務的ではない。したがって, 前置された引用句によって say の意味が伝達されていると考えられる。以下の例も同様の証拠となる。

(13) a. “She always was highly strung,” pursued Henry, leaning back in  
the car as it shot past the church. (Gyoda (1999: 290))

b. \*Henry pursued that she always was highly strung. (Gyoda (1999: 291))

本来, 動詞 pursue は that 節を選択できないことに加え, 伝達動詞であるわけでもない。しかし, (13a) が示すように, 引用句が文頭に位置することによって say の意味が伝達され, QI において使用可能となっていると考えられる。一方, (13b) では文頭に引用句が存在せず発話の意味が伝達されないため, 間接引用における pursue の使用は不可能である。

## 5. 引用句の特性

本節では, 引用句の持つ統語特性について概観する。まず, (14) に示されるように, 前置された引用句は wh 句と共起することができない。

(14) a. Who said, “The sun rises in the west.”?

b. \*“The sun rises in the west,” who said?

c. \*Who, “The sun rises in the west,” said? (Gyoda (1999: 284))

また, 従属節においても同様の振る舞いが観察される。

(15) a. \*I wonder who “Leave me alone!” shouted. (cf. Wu (2008: 99))

b. \*I was taken aback when “I live alone” she replied.

(cf. Huddleston (2002: 1026))

これらの例は, 引用句が wh 句と同様に CP 指定部を占める要素であることを示唆している。この wh 句と引用句の共起制限に対して, Collins and Branigan (1997) は空演算子が動詞の項としてその補部位置に基底生成され, その後 CP 指定部に移動し, 談話において引用句と結びつくという分析を提示していることを 2 節で見た。しかしながら, この分析には以下のような問題がある。まず, (16) に示すように, QC には他動詞だけでなく, 自動詞も生起可能であるため,

引用句と動詞との間に選択関係があるとは考えられない。

(16) a. “I don’t know,” he shrugged. (Yamaguchi (2009: 222))

b. “Right,” nodded Henry. (Uchida (1979: 24))

さらに、(17) では他動詞 *shake* が用いられているが、*shake* は引用句ではない目的語を補部に選択しているので、引用句が項として動詞の補部位置に生起し、選択関係を築くとは考えにくい。

(17) “That’s not my fault,” Charlie shook his head. (Yamaguchi (2009: 222))

加えて、空演算子の仮定そのものにも疑問の余地がある。Wu (2008) によれば、引用句はそれ自身が含まれる節内における統語操作に関与することができる。

(18) a. When the surgeon said “Give me the scalpel”, she handed him the wrong  
*one*.

b. When he said “Leave!”, she wouldn’t \_\_\_\_.

c. When he said “Turn right”, she did the *opposite*. (Wu (2008: 105))

(18a) において、代用形 *one* は引用句内の *scalpel* を先行詞に取っている。(18b) においては動詞句省略が適用されているが、省略されているのは *leave* である。そして、(18c) における *did the opposite* の解釈は、引用句の示す *turn right* とは反対のことをしたという解釈、つまり *turned left* という解釈になる。これらの事実は、引用句が統語構造に直接組み込まれていることを示唆する。それゆえ、空演算子を仮定することには問題があると考えられる。

本節では、引用句の統語特性について以下の3点について議論した。1点目は引用句が動詞に選択される項ではないということ。2点目は *wh* 句と同様に CP 指定部の位置を占めること。そして、3点目は空演算子ではなく引用句そのものが統語構造に組み込まれているということである。

## 6. 分析

本節では、これまでの議論をもとに、QC の派生に対する提案と分析を示す。それに加えて、本提案の帰結として QC の持つ様々な特性に対して説明が与えられることを示す。

### 6.1. 提案

本節では、QCの派生に関する提案と分析を提示する。Chomsky (2001) 以降の現行のミニマリスト・プログラムのもとでは、統語構造はフェイズという構成単位の連続体をもとに派生される。命題内容を伴うCPと主題内容を構成するv\*Pがフェイズとしてみなされ、フェイズ内での統語操作が全て終了した後、フェイズ主要部の補部が音韻部門と意味部門へと転送される。このフェイズ理論のもとに、Tanaka (2011) は構成素間の修飾関係の構築条件として (19) を提案している。

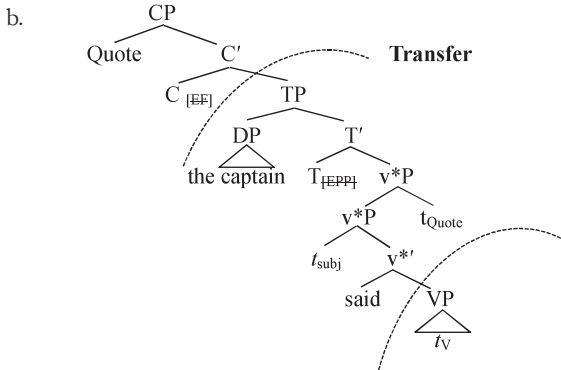
- (19) The modification interpretation is formed within a single transferred domain.  
(Tanaka (2011: 183))

本稿では、5節での議論のもとに、引用句は項ではなく動詞を修飾する付加詞であると仮定するとともに、Tanaka (2011) によって提案された (19) を援用し、QCの認可条件として (20) を提案する。

- (20) The main verb and the quote must be within a single transferred domain.

(20) は動詞と引用句が修飾関係の構築のため、単一の転送領域内に含まれなければならないとする条件である。この提案の下、まず倒置が起きていない(1a) ((21a) として再掲) の派生について考察する。(なお、円弧は転送領域を示している。)

- (21) a. “We haven’t had that spirit here since 1969,” the captain said.





(21a) の構造である (21b) では、まず  $v^*P$  フェイズにおいて、主語 DP が  $v^*P$  指定部に併合され、引用句は  $v^*P$  に右付加される。次に CP フェイズにおいて、T が派生に導入された後、主語 DP の持つ解釈可能な  $\phi$  素性 (interpretable  $\phi$ -feature:  $[i \phi]$ ) が T の持つ解釈不可能な  $\phi$  素性 (uninterpretable  $\phi$ -feature:  $[u \phi]$ ) と一致関係に入り、 $[u \phi]$  は削除される。そして、T の EPP 素性を満たすために主語 DP は TP 指定部に移動する。その後、引用句は C の持つ末端素性 (Edge feature: EF) を満たすために CP 指定部に移動することにより、「引用句・主語・動詞」の語順が派生される。Chomsky (1995) によれば、A バー移動のコピーは A 移動のコピーとは異なり意味内容を保持するため、修飾関係を結ぶことが可能である。これは (22) の事実により支持される。

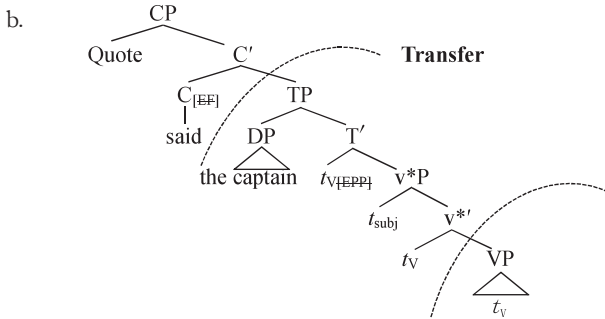
(22) **Of which car** was [the driver \_\_\_\_] awarded a prize?

(Chomsky (2008: 147))

(22) において、wh 句は CP 指定部に移動しているが、the driver との修飾関係は元位置 ((22) の下線部) において構築されている。したがって、(21b) では、引用句のコピーと動詞が同一の転送領域 (この場合は TP) において修飾関係を構築するので、(20) の条件を満たしているといえる。<sup>2</sup>

一方、倒置が生じている (1b) ((23a) として再掲) においては、(23b) のように引用句が CP 指定部に直接併合されると仮定する。その場合、仮に動詞が  $v^*P$  内に留まるとすると、引用句とは異なる転送領域に含まれることになるため、(20) の条件によって排除されてしまう。したがって、動詞は引用句と同一の転送領域 (この場合は CP) に含まれるために、T を経由して C に移動することになる。これにより、この派生は (20) の条件を満たし、「引用句・動詞・主語」という倒置語順が派生される。<sup>3</sup>

(23) a. “We haven’t had that spirit here since 1969,” said the captain.



## 6.2. 帰結

本節では、本提案の帰結として、QC（とりわけQI）の持つ様々な特性に対して説明が与えられることを示す。まず、1点目は助動詞との共起制限である。(24) に示されるように、QIにおいては、主語・助動詞倒置が許されない。<sup>4</sup>

- (24) a. “Where is my key?” asked John.  
 b. \*“Where is my key?” has John asked.  
 c. \*“Where is my key?” has asked John.  
 d. \*“Where is my key?” was asking John.  
 e. \*“Where is my key?” would ask John. (Wu (2008: 81))

その一方で、(25) に示されるように、倒置が生じていない場合、助動詞はQCに生起することが可能である。

- (25) a. “Where is my key?” John asked.  
 b. “Where is my key?” John has asked.  
 c. “Where is my key?” John was asking.  
 d. “Where is my key?” John would ask. (Wu (2008: 82))

(24) と (25) の対比は本提案のもとで、以下のように説明される。(26) は (24b) の派生を示している。

- (26) [CP Quote has<sub>[EFF]</sub> [TP John *t*<sub>[EPP]</sub> [*v*\*P *t*<sub>subj</sub> asked [*v*P *t* ]]]

前節で述べたように、QIの場合、引用句はCP指定部に直接併合される。そのため、(20) の条件を満たすためには、動詞askはCへと移動しなければならない

い。しかし、(26) では助動詞 *have* が T へ挿入されているため、動詞 *ask* は T を経由して C へ移動することができない。仮に、T を経由せずに  $v^*$  から C へと直接移動すると、この移動は主要部移動制約 (Head Movement Constraint: HMC (Travis (1984))) に違反するため排除される。加えて、助動詞 *have* が動詞の代わりに C へ移動したとしても、(20) の条件を満たすことはできない。したがって、(26) の派生は収束しない。

次に、倒置が生じてない (25b) の例について検討する。(25b) の派生は (27) に示されている。

(27) [CP Quote C[ $\text{EPP}$ ] [TP John has[ $\text{EPP}$ ] [ $v^*$ P  $t_{\text{subj}}$  asked [ $\text{VP } V$ ] /Quote]]]

前節で述べたように、倒置が生じていない場合、引用句は  $v^*$ P に右付加される。引用句は CP フェイズにおいて、C の EF を満たすために、CP 指定部へ移動する。(26) と同様、助動詞 *have* が T に挿入されるため、動詞 *ask* は C へと移動することはできない。しかしながら、この派生においては、(20) の条件は  $v^*$  に位置する動詞 *ask* と移動によって元位置に残された引用句のコピーとの間で満たされるため、派生が収束する。

QC の持つ 2 つ目の特性として、否定辞との共起制限が挙げられる。

(28) a. \**“Let’s eat,” not said John just once.*

b. \**“Let’s eat,” said not John just once.*

c. \**“Let’s eat,” didn’t John say just once.* (Collins (1997: 34))

(28a, b) に示されるように、QI は否定辞と共起することはできない。加えて、(28c) に示されるように、do 支持を適用することも不可能である。本稿では、否定辞を伴う QI は (29) の構造を持つと仮定する。なお、ここでは否定辞 *not* は主要部として併合され、NegP は  $v$ P の上部に位置するという標準的な仮定 (Pollock (1989)) に従う。

(29) [CP Quote Verb[ $\text{EPP}$ ] [TP Subj  $t_v$ [ $\text{EPP}$ ] [NegP not [ $v^*$ P  $t_{\text{subj}}$   $t_v^*$ ] [VP  $t_v$ ] ]]]]

(28a) では、主語 DP は *not* に後続しているため、基底生成位置である  $v^*$ P の指定部に残置していると考えられる。これは、TP 指定部の位置が空であり、T の持つ EPP 素性が満たされていないことを意味する。英語では、EPP 素性が義務的に照合される必要があるため、それが満たされていない (28a) は非文

法的となる。同様に、(28b)においても主語DPがnotに後続しているため、TのEPP素性が満たされていない。加えて、動詞が主要部であるnotを越えて移動しており、HMCにも違反している。したがって、(28b)は非文法的である。(28c)については、助動詞の共起制限と同様の説明が当てはまる。(28c)では、doがTに挿入されているので、動詞がTを経由してCへ移動することができない。したがって、(20)の条件が満たされず非文法的となる。<sup>5</sup>

3点目に、主語と動詞の隣接性が挙げられる。QIでは、主語と動詞が隣接していなければならない。そのため、それら2つの要素の間に他の要素が介在してはならない。しかしながら、(30)に示すように、不変変化詞はQIにおいて生起可能である。(30)では、主語と動詞の間に不変変化詞が介在しており、隣接性が満たされていない。

(30) a. “Where do you want the concrete?” called up Fanny to Max.

b. “Don’t drop the bricks!” shouted out Trudy to Carl.

(Collins and Branigan (1997: 4))

本稿ではEpstein et al (2016)で提案された主要部同士の外的対併合を仮定することにより、この特性に対して説明を与える。Epstein et al (2016)では、統語部門へ語彙項目を導入する前に、2つの語彙項目を対併合することによって、1つの複合体を形成する外的対併合という操作を提案している。ここではこの操作のもとで、動詞と不変変化詞は統語部門に導入される前に複合主要部を形成すると仮定する。この仮定は(31)の事実によって支持される。

(31) \*“Back to the bunker!” yelled right out the captain to the troops.

(Collins and Branigan (1997: 5))

(31)が例証するように、副詞が動詞と不変変化詞の間に介在することは不可能である。このことは、(30)のような例において、動詞と不変変化詞が外的対併合によって複合主要部を形成した状態で派生に導入されていることを示唆する。

4点目に、QIにおいて主語と結びつく遊離数量詞が生起不可能であることが挙げられる。(32a)に示されるように、倒置が生じていない場合は、数量詞が主語から遊離することが可能である。対照的に、(32b)と(32c)の対比からわかるように、QIでは数量詞が主語から遊離することができない。

- (32) a. “We must do this again,” the guests all declared to Tony.  
 b. “We must do this again,” declared all the guests to Tony.  
 c. \*“We must do this again,” declared the guests all to Tony.

(Collins and Branigan (1997: 6))

Collins and Branigan (1997) は, Sportiche (1988) に従い, QIにおいて数量詞が主語から遊離できないという (32) の事実を, 主語が基底生成位置に残置するという主張を支持する証拠として提示している。しかしながら, 3節の議論を考慮すると, QIにおいても主語DPはTP指定部へ移動していると考えられる。そのため, 主語の移動があるにもかかわらず, 遊離数量詞の生起が許されないという事実は, 本稿の主張とは一見すると矛盾するように思われる。しかし, Sportiche (1988) の提案する遊離数量詞の残置分析にはいくつかの理論的問題がある。

Bobaljik (1995) は, 遊離数量詞を副詞であると分析している。(33) のような数量詞が遊離している構造のみが可能な事例が存在するが, この対比は, 遊離数量詞allが主語DPの一部として基底生成されるとするSporticheの分析では捉えることができない。

- (33) a. Some (of the) students might all have left in one car.  
 b. \*All (of) some (of the) students might have left in one car.

(Bobaljik (1995: 225))

さらに, Baltin (1995) が指摘するように, Sporticheの分析では, (34) に示される例も捉えることができない。

- (34) a. I persuaded the men all PRO to resign.  
 b. The teacher ordered the two boys both PRO to pay close attention.

(cf. Baltin (1995: 232))

(34) では, 数量詞の左側に現れている母型動詞の目的語DPは, PROのコントローラーとして機能している。しかし, 目的語コントロール構文では例外的格標示構文の場合とは異なり, 不定詞節内の主語位置から母型節の目的語位置への移動はない。これは (35) に示されるように, 例外的格標示構文では, EPP素性を満たすために, 虚辞のthereを不定詞節の主語位置に挿入すること

が可能であるが、目的語コントロール構文では、虚辞の *there* の挿入は不可能であることから支持される。

(35) a. I believe there to be no alternative.

b. \*We persuaded there to be a strike. (Radford (1988: 320))

したがって、(34)において、数量詞は目的語の右側に現れているが、これは目的語の移動によって数量詞が残置した結果ではない。

以上の議論から、Sporticheの分析には問題があるといえる。したがって、QIにおいて遊離数量詞の残置が不可能であるという事実は、主語の移動の有無とは独立した問題である。それゆえ、遊離数量詞の可否は主語が基底生成位置に残置するというCollins and Branigan (1997)の主張を支持する証拠とはならない。その一方で、この遊離数量詞の可否の問題に対して、本稿では、Takami (1998)で提案された(36)を仮定することによって説明を与える。

(36) The Predication Constraint on Floated Quantifiers:

Since floated quantifiers function as (secondary) subjects, they must be followed by their (semantically appropriate) predicates.

(Takami (1998: 155))

(36)は遊離数量詞が二次的な主語として機能するため、意味的に適切な述語によって後続されなければならないとする制約である。具体例として(37)を検討する。

(37) The students all came to the party.

(Takami (1998: 150))

Takami (1998)によれば、数量詞が遊離した主語DPのThe studentと述語であるVP (came to the party)の間の叙述関係に加えて、数量詞allとVPの間にも二次的な叙述関係が構築される。

遊離数量詞に関するこの仮定は、本稿での提案とも整合するものである。この仮定をもとに、(38)の文法性に対して説明を与える。(39)は(38)の構造を示している。

(38) \* "We must do this again," declared the guests all to Tony.

(39) [CP Quote declared<sub>i</sub> [TP the guests<sub>j</sub> t<sub>i</sub> [VP t<sub>j</sub> all [VP t<sub>i</sub> to Tony]]]]

(39)において、QIにおける主語はTの持つEPP素性を満たすためにTP指定部へ移動するため、数量詞allが主語から遊離している。それに加えて、動詞はTを経由してCまで移動するので、述語であるdeclaredが数量詞allに先行している。それゆえ、主語から遊離した数量詞の後ろに叙述関係を形成できる要素が存在しない。したがって、(38)は(36)を満たさないため、非文法的なものとして排除される。

5点目に、本稿の分析は理論的・経験的に先行研究よりも優れていることが挙げられる。まず、2節で概観したCollins (1997), Collins and Branigan (1997)とは異なり、EPPに関してQC/QIのみに特別な規定を設ける必要はなくなり、理論的に望ましいと言える。さらに、QC/QIの主語は通常的主語位置であるTP指定部に移動するため、3節で見た付加疑問文やコントロールに関する経験的事実を正しく説明することができる。

## 7. 結論

本稿では、QCの派生に対してフェイズ理論に基づき説明を与えることを試みた。いくつかの経験的証拠に基づき、QIの主語はTP指定部に移動し、文頭の引用句は付加詞であると主張した。また、QCに現れる動詞は引用句による意味の希薄化によって、機能的役割を担うものであると主張した。さらに、QCに対して、フェイズ理論に基づく(20)の認可条件を提案することにより、倒置を伴うQCと伴わないQCの派生が正しく説明されることを論じた。加えて、本提案のもとで、QCの持つ様々な特性に対して説明が与えられることを示した。<sup>6</sup>

## 注

<sup>1</sup> 場所句倒置を含む付加疑問文においては、虚辞のthereが現れることがBowers (1976)によって指摘されている。

(i) In the garden is a beautiful statue, isn't there/\*it? (Bowers (1976: 237))

<sup>2</sup> 査読者より、以下の例の違いが本稿の分析の下で、どのように説明されるのかという問題提起があった。

(i) a. \*He giggled, “Cochon.”

b. “Cochon,” he giggled.

4節で述べたように、引用句は前置されることにより、発話の意味を伝達する。従って、引用句が前置されていない (ia) の例は、発話の意味が伝達されないことになるので、QCとして成立しない。一方で、(ib) は引用句が前置されているので問題とはならない。したがって、発話の意味の伝達のため、引用句は義務的に前置される必要があると考えられる。

<sup>3</sup> 査読者より、引用句の扱いについて以下の指摘を受けた。2カ所の基底生成位置を設けることに対する経験的証拠の有無とそれらの意味の違いについてである。これについては、Chapman and Kučerová (2016) の分析が参考になる。Chapman and Kučerováによれば、英語の、wh付加詞であるwhyには2通りの基底生成位置が存在する。1つは、CP指定部、もう1つはvPの上部に位置する機能投射であるCauseP (Kratzer (1996)) の指定部である。CP指定部に基底生成されるwhyは理由の解釈のみを持ち、CauseP指定部に基底生成されるwhyは理由の解釈に加えて目的の解釈を持つ。5節で述べたように、引用句はwh句と平行的な振る舞いを示すため、whyの場合と同様に2つの異なる基底生成位置を持ち、基底生成位置により意味の違いが生じると考えられるかもしれない。

<sup>4</sup> 以下の例が示すように、動詞が助動詞haveの直後に来る場合には容認可能性が高くなるとする判断もある。

(i) a. ?? “What time is it?” had asked Pety of Mons.

(Collins and Branigan (1997: 13))

b. ? “Yippeel!” has said Gil on more than one occasion.

(Bruening (2016: 124))

しかし、これらの例は完全に容認可能ではないため、ここではWu (2008) の判断に基づき、非文法的なものとして扱う。

<sup>5</sup> Gyoda (1999) によれば、(i) の対比が例証するように、引用句の表す内容が否定されない場合には、QCにおいて否定表現を用いることが可能である。

(i) a. “I am so happy,” Mary didn’t deny. (Branigan and Collins (1993))

b. \* “Let’s eat,” John didn’t say. (Gyoda (1999: 285))

Gyoda (1999) は、(ia) において否定表現が可能である理由は、Maryが発言したということが保証されるからであると述べている。(i) の対比から、GyodaはQCに



は引用句の内容を否定してはならないという何らかの意味的制約が課されていると結論付けている。したがって、本稿で提案した統語分析に加えて、意味的制約も仮定する必要があるかもしれない。

<sup>6</sup> QIに見られる特性のうち、本稿で扱っていないものの一つとして (i) に示される他動性制約がある。

(i) a. \*“Where is my key?” asked John Mary.

b. “Where is my key?” asked John of Mary.

(ii) John asked Mary. “Where is my key?” (Wu (2008: 107))

(ia) に示されるように、間接目的語はQIにおいて生起不可能である。その一方で、(ib) に示されるように、PPは主語に後続した形でQIにおいて生起可能である。また、このような制約は (ii) に示されるように、倒置が生じていない場合には観察されない。この点に関しては、今後の研究課題としたい。

## 参考文献

- Arano, Akihiko. 2014. Two Types of Main Verb Inversion. *English Linguistics* 31: 23–44.
- Baltin, Mark R. 1995. Floating Quantifiers, PRO and Predication. *Linguistic Inquiry* 26: 199–248.
- Bobaljik, Jonathan D. 1995. *Morphosyntax: The Syntax of Verbal Inflection*. Doctoral dissertation, MIT.
- Bowers, John. 1976. On Surface Structural Grammatical Relations and the Structure-Preserving Hypothesis. *Linguistic Analysis* 2: 225–242.
- Branigan, Phil and Chris Collins. 1993. Verb Movement and the Quotative Construction in English. *MIT Working Papers in Linguistics* 18: 1–13.
- Bruening, Benjamin. 2016. Alignment in Syntax: Quotative Inversion in English. *Syntax* 19: 111–155.
- Chapman, Cassandra and Kučerová, Ivona. 2016. Structural and Semantic Ambiguity of *why*-questions: An Overlooked Case of Weak Islands in English. *Proceedings of Linguistic Society of America*. Volume 1: 1–15.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Collins, Chris. 1997. *Local Economy*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Collins, Chris and Phil Branigan. 1997. Quotative Inversion. *Natural Language & Linguistic*

- Theory* 15: 1–41.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by Phase. *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz: 1–52. Cambridge, MA: MIT Press
- Chomsky, Noam. 2008. On Phases. *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta: 89–155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Culicover, Peter, W. 1992. English Tag Questions in Universal Grammar. *Lingua* 88: 193–226.
- Epstein, Samuel D., Hisatsugu, Kitahara and T. Daniel Seely. 2016. Phase Cancellation by External Pair-Merge of Heads. *The Linguistic Review* 33, 87–102.
- Gyoda, Isamu. 1999. On the Quotative Construction in English: A Minimalist Account. *English Linguistics* 16: 275–302.
- Hornstein, Norbert and Jairo Nunes. 2002. On Asymmetries between Parasitic Gap and Across-the-Board Constructions. *Syntax* 5: 26–54.
- Huddleston, Rodney. 2002. Content Clauses and Reported Speech. *The Cambridge Grammar of the English Language*, ed. by Rodney Huddleston and Geoffrey K. Pullum: 947–1030. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kratzer, Angelika. 1996. Serving the External Argument from its Verb. *Phrase Structure and the Lexicon* ed. by Johan Rooryck and Laurie Zaring, 109–137. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Nissenbaum, Jon. 2000. *Investigations of Covert Phrase Movement*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Pollock, Jean-Yves. 1989. Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20:365–424.
- Radford, Andrew. 1988. *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, John R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Sportiche, Dominique. 1998. A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituents Structures. *Linguistic Inquiry* 19: 425–449.
- Takami, Ken-ichi. 1998. Passivization, *Tough*-Movement and Quantifier Float: A Functional Analysis Based on Predication Relation. *English Linguistics* 15: 139–166.
- Tanaka, Hiroyoshi. 2011. On Extraposition from NP Constructions: A Phase-based

- Account. *English Linguistics* 28: 173–205.
- Travis, Lisa. 1984. *Parameters and Effects of Word Order Variation*. Doctoral dissertation, MIT.
- Uchida, Seiji. 1979. *Cbokusetsunabou to Dentatsudoushi. Studies in Grammar and language*: 23–34. Tokyo: Kenkyusha.
- Wu, Hsiao-hung Iris. 2008. *Generalized Inversion and the Theory of Agree*. Doctoral dissertation, MIT.
- Yamaguchi, Haruhiko. 2009. *Meiseki na Inyou, Shinayaka na Inyou Wabou no Nichiei Taishou Kenkyu*. Tokyo: Kuroshio.

## Synopsis

### A Syntactic Analysis of Quotative Constructions in English

Ryoya Kobayashi

This article attempts to account for sentences including a quote which is located in sentence-initial position, which is called “quotative construction” (QC). Among them, a sentence with subject-verb inversion is called “quotative inversion” (QI). The surface structure of QI is similar to that of locative inversion constructions. Therefore, QI has been given analyses similar to those of locative inversion: post-verbal subject DPs of these two types of inversion constructions remain in their base-generated position.

On the other hand, this paper claims that subject DPs in QI do not stay in situ but move to [Spec, TP] as in ordinary sentences. It is also assumed that the quote is not an argument selected by the main verb, but an adjunct modifying the main verb, contrary to the arguments in previous studies. As for verbs in QC, this paper makes an assumption that they are present in order just to complement an action of communication because of the semantic reduction caused by the presence of the quote.

As an alternative analysis of QI, this paper proposes a license condition on QC that the proper modification relation between the quote and the verb must be established within a single transferred domain along the lines of Tanaka (2011). It is shown that this proposal can account for the derivations of QC. Furthermore, some properties of QC receive a principled explanation under the analysis proposed here.